

平成27年度第5回 岡山市総合教育会議

日 時:平成27年10月26日(月)

午後2時～

場 所:市庁舎 第3会議室

会 議 次 第

1 開 会

2 協議事項

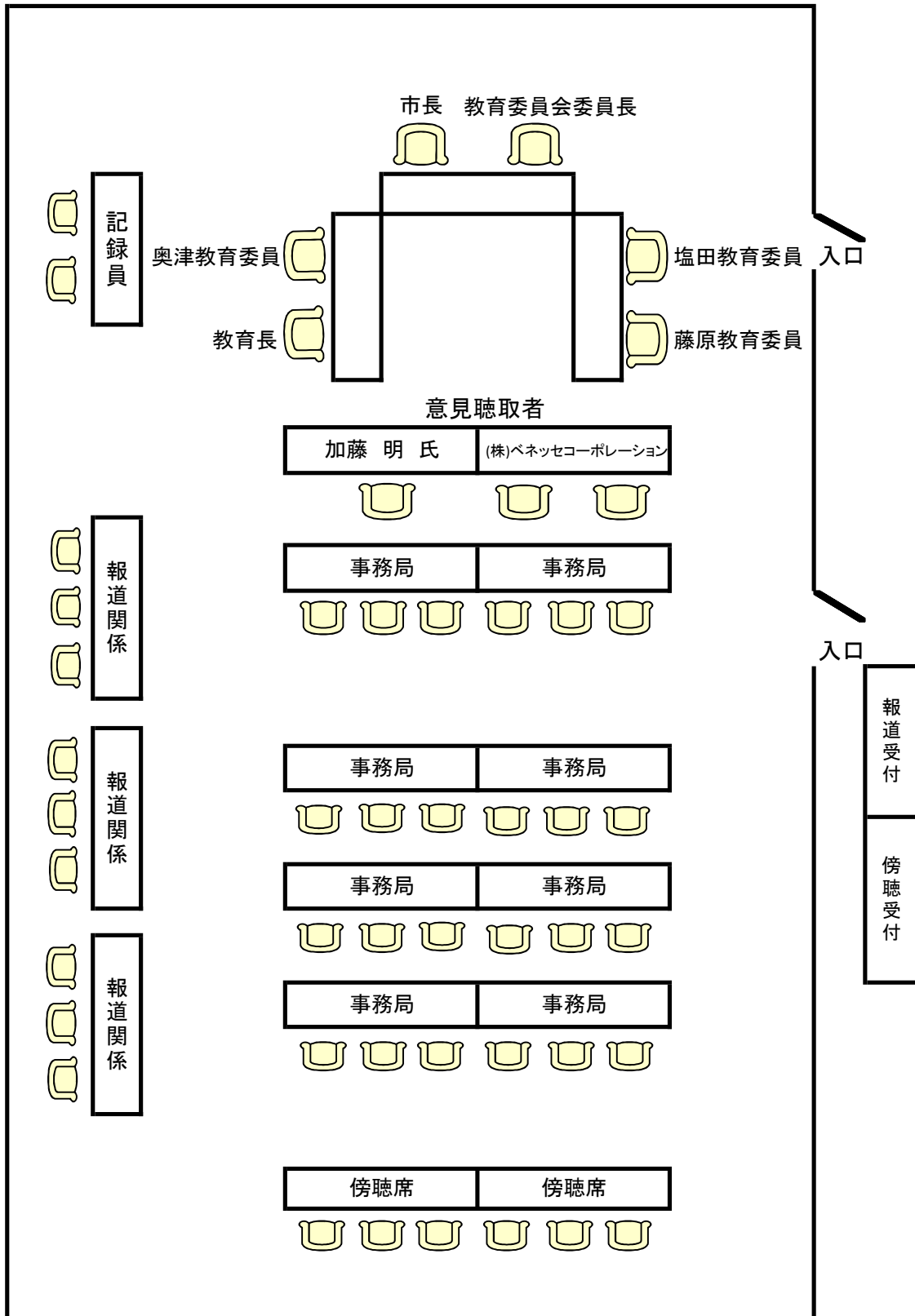
(1) 有識者からの意見聴取について

関西福祉大学学長 加藤 明 氏

(2) 平成27年度全国学力・学習状況調査結果の概要について

3 閉 会

第5回総合教育会議 配席図





これからの教育の課題と展望

岡山市総合教育会議
平成27年10月26日

関西福祉大学 加藤 明

教育における課題解決について

- 取り組みの成果は上がったのか
 - ・小中一貫教育の課題
 - ・アクティブ・ラーニングの取り入れ
 - ・習熟度別、少人数指導
 - ・T.T 等々
- 上がったのなら
 - 方法・方策の共有化を
- 上がっていないなら
 - 課題の共有化を
- 解決すべき課題・目標は何か
 - 解決のための**方法・方策**は
 - 成果の確かめ・**評価**を
 - いつ、どのような手だてで
- その結果による
 - 取り組みの見直し、目標の見直し
- 目標と指導と評価の一体化
教育課程の縦断的構造

一貫・連携教育の必要性

- 6・3制の見直し
- 10才の壁への対応
- 発達の加速度現象
- 思春期は小学生から
- 4・3・2制(5・4制)
- 4・・・通常の学級担任制
- 3・・・教科担任
- +心のケア担当
- 2・・・通常の教科担任制
- 高校も含めて 4・4・4制も
- 義務教育学校(2016年4月から施行)
- 幼少、小中の一貫教育
- ・ギャップの克服
- ・壁を乗り越える経験も必要
- 小中の一貫教育
- ・小学校の適正規模への
- 統廃合
- 中高の一貫教育
- ・高校の生徒数の安定的
- 確保
- 学力の向上
- ・確かな学力(知性重視)
- ・結果重視の教育改革
- 全国学力調査等
- evidence,
- outcome based education
- 生徒指導上の課題の解決

小手先ではなく、
自立を促すように

- ・一貫・連携で連続性を保持したいこと、つなぎたいことは何か？学校や地域の課題、ねがい
- ・どのように繋いでいくのか？方法、方策は？
- ・評価は？
- ・教職員の意識は同じ方向か？

まとめ 小中一貫・連携が提起する課題と展望

— 一貫だけでなく、学校教育全体にとって —

< 学びの課題から >

4. ③. 2

・小中の指導法の相違をどう乗り越

えさせるか

小のアクティブ・ラーニング型

中の講義型

→ 内容と能力のバランスを単元で

統合！

→ さらに、自学力の育成によって

< 育ちの課題から >

4. ③. 2

・10歳の壁をどう乗り越えさせるか

・身体の成長と心の成長の

アンバランス

心の幼さのケアから

乗り越える力を

△感情をコントロールする力

△規範意識、基本的な生活習慣

△思いを伝えたり、思いを理解する

コミュニケーション力

・「受け入れる、受け止める、共感する、支える」
(保育案)

・コミュニケーション力、コラボ力、前向きで

健康的な自己評価力等の育成によって

心のケアから、成長、自立、乗り越える力を



自立の検討から導き出した「学びのスタンダード」を目標及び評価の規準として

・可能な範囲において、児童、生徒及び保護者、地域の目標及び評価として

アクティブ・ラーニングとは

- 1990年代のアメリカの大学改革から起こった大学の教授法の改革
「聴く」という受動的な講義型授業に対して、
「話す・書く・表現する」を取り入れた**能動的、主体的、自分の課題とした授業を!**
 - しかしながら、現代では 社会が求める育ちの姿に
⇒ <消極的には> 全入時代の学生のレディネスから
 - 高校までの教育課程の学力の定着状況の低さ
 - 志、将来設計の弱さ
 - 能力や意欲の弱さ
 - <積極的には> 社会が求める実践的能力(コンピテンシー)やリテラシー
 - 学力の3要素(学教法、学習指導要領の総則)
 - 教員にも求められる資質・能力 ⇒『プロ教師のコンピテンシー』 明治図書
 - 古典的なリテラシーとしての3R'sから
PISA型学力のリテラシーへ(特に情報活用力としてのリーディング・リテラシー)
 - アクティブラーニングに定型はない
PBL(project based learning, problem based learning)、**反転学習**、**体験学習**、**発見学習**等々
要は、主体的、能動的に、知識・技能を活用して問題解決に取り組む学習
- 「はい、はい、あてて」「忘れました」という子、手は挙げないがノートにはしっかり考えている子。
×アクティブはあるがラーニングなし。思考の活性化、アクティブに、表現力と意欲、自信を。
- 課題解決学習、体験学習、発見学習、調査学習、
PBL、**反転学習(要一工夫)**も
要は、主体的、能動的に、習得した知識・技能を
活用して学習に
取り組む中で**教科を超えた汎用的な活用**の能力
を育てること

Why?

アクティブノートと、知の協働(繰り返しによる収束に、拡散を相補させて)

「開く」のが教師の仕事

何を開くのか

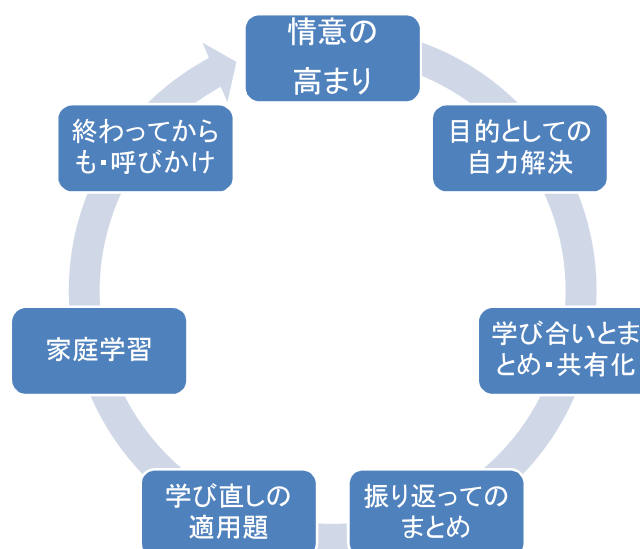
- これまで見えなかった**世界を開いてやる**
小学校なら 教材を開いてやる
幼稚園なら 遊びの中で開いてやる
- 見えなかった世界を開きながら
開く手応え(学ぶ手応え)と、開き方(すべ)
を教えることによって
子どもの可能性を開いてやる
- ・教育をなめるな。子どもをなめるな。

能動的、主体的、自分事として ーアクティブ・ラーニングによる授業改革ー

「開く」授業を

- ① 展開するにつれての情意の高まりを
- ② 目的としての自力解決・初発の感想
 - ・活用だけでなく、習得においても
 - ・ノートをアクティブに ・見通しのあるヒントカード
- ③ 自力解決の成果を持ち寄っての学び合いと、まとめ・共有化
 - ・収束的思考による練り上げ&拡散的思考による創造等の
知的な協働作業とことばの力を育てる場
- ④ 学習者による振り返りとしてのまとめ
- ⑤ 学び直しとしての適用題
- ⑥ 家庭学習 すらすらできるへ、考え方をさらに活用して
- ⑦ 終わってからのための「呼びかけ」

開く授業ー真のアクティブ・ラーニングの実現ー



<ノート指導に工夫を>

板	書
<ul style="list-style-type: none"> ・+自分が大切と思うこと ・見ました係・朱入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考え ・友だちの考え ・ラフスケッチ

- ・板書、ノートによる積極的な言語力・思考力の指導を!
- ・「ノートは大事に使う、楽しく使おう。」
- ・使い始め、使い終わり。Vol. 1
- ・このようなノートによる足跡がポートフォリオ

- ・ノート指導は、板書を写すだけでなく、行間を埋めたり、発表前に自分の考えをまとめたり(下書き、ラフスケッチ)、友だちの考えを要約するといった、いわゆるマイノートの奨励
- 授業の振り返り**や、保護者への学校の様子への報告にも、そこにピンポイントの朱が入っているとよい、
- ・具体的で、以前に比べての向上や成長に対するほめことば、励ましのことばを!
- ・メモの取り方、まとめ方、インタビューの仕方等を国語と他教科・領域と有機的に関連させて
- ・教科に固有の言語及び言語活動と、教科をこえて汎用性のある言語及び言語活動を

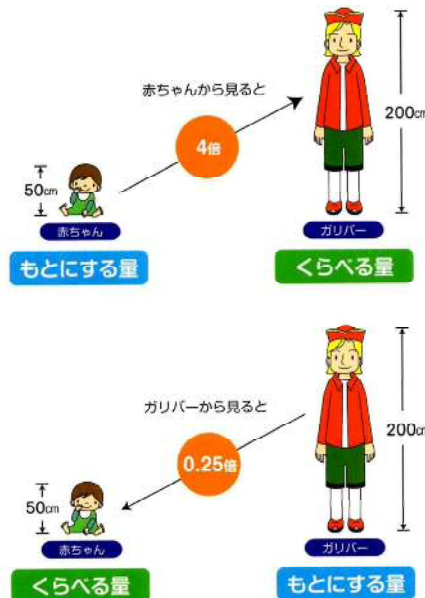
×成果物
◎アクティブに

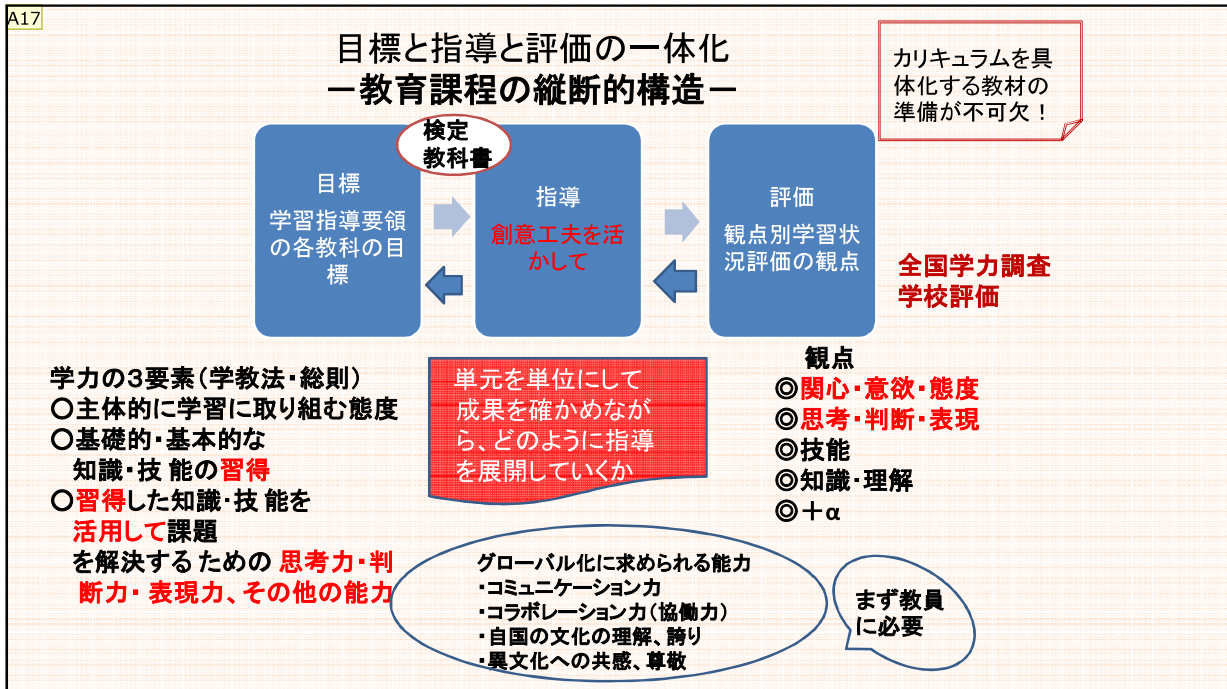
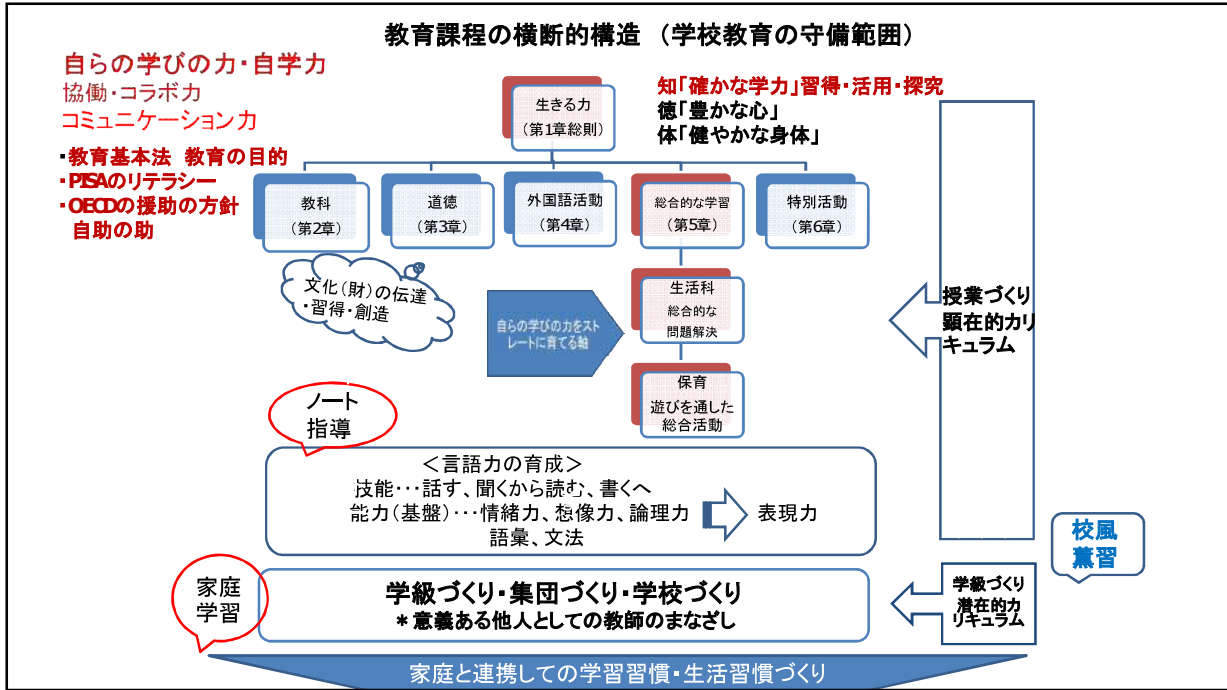
ゲストティーチャーの
聞き取り
児童朝礼

ヒントカード 「割合」(5年)

(比べる量) ÷ (もとになる量) = (割合) くらもと わり子

$$\frac{\text{くら}}{\text{もと}}$$





結果に責任をもつ教育を

- 『学校や教師は指導の説明責任だけでなく、指導の結果責任も問われていることを前提としつつ、評価の観点並びにそれぞれの評価の考え方、設定する評価規準、評価方法及び評価時期等について、今回の学習指導要領改訂の基本的な考え方を踏まえ、よりいっそう簡素で効率的な学習評価が実施できるような枠組みについて、更に専門的な見地から検討を行う。』

(「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」中央教育審議会 平成20年1月)

どのような結果に責任を負うのか
そのためにはどのような方策が必要か

「がんばろう」
はおかしい

簡素で効率的な評
価のためには

教育改革の流れ

学習指導要領は最低基準、ナショナル・ミニマム

教科書の内容は最低基準を具体化したもの

各学校が評価規準を設定して、相対評価ではなく、目標基準評価（いわゆる「絶対評価」）で。成果が不十分であれば教え直しや補充指導を

「学びのすすめ」

形成的評価の活用

評価規準は、実現しなければならない目標の基準、要求水準

ナショナル・ミニマムに満足せず、発展学習の奨励。歯止め規定の廃止

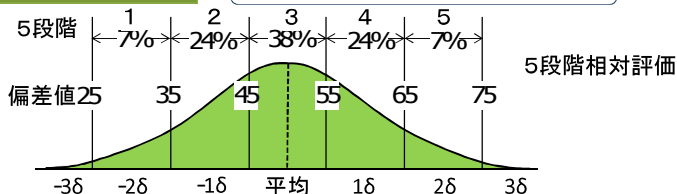
相対評価から(いわゆる)絶対評価へ

基準による「評価」の分類

評
価
基
準

Norm⇒相対評価

集団の中における位置づけ



Criterion⇒到達評価

到達したかどうかを判断

評価規準(文部用語)

4観点のバランスのとれた学力

豊かで幅のある学力の実現をめざし「**新しいcriterion**」として導入

知識・理解、技能といった到達目標にとどまらず、思考力等の高次の認知領域及び関心・意欲・態度といった情意領域の向上目標も含めて。

「**目標準拠評価**」として導入。

形成的評価を生かした授業設計

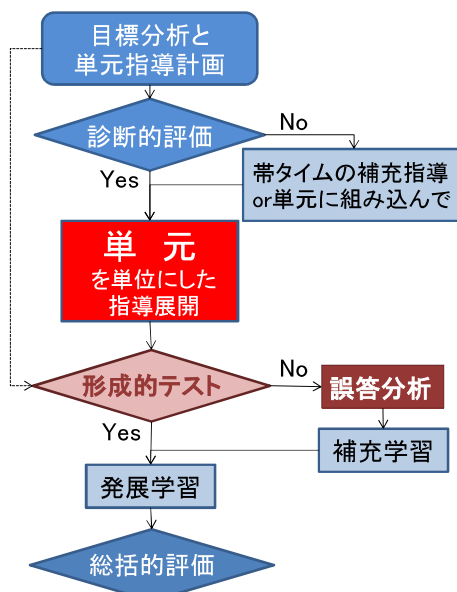
指導展開において

○短いフィードバックサイクル
(途中の「やさしい評価」)

- ・子どもの表情
- ・学習の様子
- ・ノート確認
- ・小テスト等

両方を駆使する

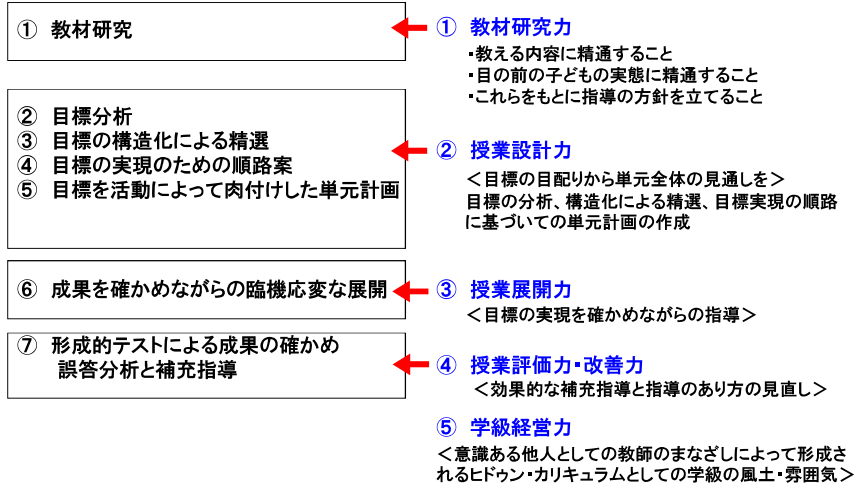
○長いフィードバックサイクル
(単元終了直前の形成的
テスト)



これからの授業づくり — 目標と指導と評価を一体化させた実践を —

授業設計の手順

教師のコンピテンシー



単元計画に組み込む指導要素11

- ア、単元の学習を進めるにあたって必要となる既習の知識や技能といったレディネスのチェックと、その養成
- イ、学習への前向きな構えをつくるためのゆさぶりと、それに続く**関心・意欲・態度の高まり**
- ウ、単元のなかでこれだけは体験させておきたいくさびになるような体験
- エ、教育機器の**効果的な活用**及びそのための教材、教具の準備と展開
- オ、習得のための効果的な問題解決と言語活動を活性化しての練り上げ
 - ・論理的思考力を鍛えながらの**交流とノートによるまとめ・振り返り**
- カ、ねらいにせまる効果的な**発問と板書**によるまとめと共有化
- キ、学び直しとしての**適用題**と習熟のための**練習題**
 - ・授業と家庭学習の**一体化・連携**
- ク、活用のための効果的な問題解決と言語活動を活性化しての**練り上げ**
 - ・帰納だけでなく、**演繹的思考、拡散へ**
- ケ、形成的評価の活用による**臨機応変な指導の展開**
 - ・節目、節目での小テストやノートでのチェックとピンポイントの**朱入れ**
- コ、ほめことば、励ましのことばの活用
 - ・ほめ上手、はげまし上手、叱り上手と**文書にやるほめ直しとしての所見欄**
- サ、単元末の**形成的テスト**と**誤答分析**に基づく効果的な補充指導及び朱入れによる**資料単元**の作成
 - ・授業評価、授業改善の**協働(コラボ)**

FC講演会 '15.7

大学改革は 授業改革・意識変革から

関西福祉大学 加藤 明



A5

学校は こんなところではない

- 1) 学校は、退屈を学びに来るところではない。
 - ・分かることやできることが増え、思考力や表現力が伸び、その実感や手応えを感じさせているか
 - ・そのために必要なことは、背伸びをさせること
- 2) 学校は、自信を失いに来るところではない。
 - ・自尊尊心を傷つけず、自尊心を育てているか。
 - 自分の自尊心だけでなく、友達の自尊心も。
- 3) 大学は、一人前の社会人、職業人を育てるところ
つまり、本学は、学校に来て、**賢くなり、自信が付き、**
一人前の社会人として世の中に出すところでなければならない

A6

学校とは、学習者が賢くなり、自信がつくところ

・賢くなるとは

分かることやできることが増え、考える力や判断する力、表現する力がつき、
そのような成果の統合、手応えによって、学ぶ意欲が高まり、自信がつくところ

・すぐれた授業の条件 **結果で勝負、プロセスで勝負ではない**

- ① 成果は上がっているのか
- ② その成果で十分か
- ③ 成果を返して、ほめているか、励ましているか、叱っているか

プロとしての教師は、**学力を保障**だけでなく、**人格の完成を図る**という **成長の保障**も！
プロとしての教師に求められるコンピテンシーとは、

指導力と評価力及び評価に基づく授業改善力であり

大学の教員には、専門領域についての見識の深さと広さを背景に、受講者に適切な指導を評価を形成的に機能させながら臨機応変に展開する力、評価によって自分の指導を振り返り、シラバス及び指導のあり方を改善していく力が求められる。

学び(学力保障)の課題 ー学力保障を基盤に成長保障をー

学校は賢くなるどころ、友達もできて、自信をつけるどころ

